

## 論文の内容の要旨

氏名：小谷 喜久江

博士の専攻分野の名称：博士（総合社会情報）

論文題名：遊歴の漢詩人原采蘋の生涯と詩—孝と自我の狭間で—

江戸時代の女性の教養は和歌・和文・書・画などが奨励され、漢詩・漢文の類は男性の学問とされてきたことは周知のことである。そのために、女性文学の研究は和歌・和文、あるいは俳諧・書・画の分野では目覚ましい発展がみられるが、漢詩文の分野での研究はいまだその途上にあると思われる。

しかし、江戸時代も後期になると漢詩文の隆盛とともに、長崎から入ってきた中国清代の文学、特に才能のある女弟子を育てた袁枚の影響を受けて女性の漢詩人が出現する環境が整いつつあった。この風潮を受けて儒者や医者などの家庭では能力のある娘たちにも男子と同じように漢学を学ばせるようになった。しかしながら、江戸時代の儒教的な道徳観による一般の父親の考え方は「詩非我所家、且非女子之道」というものであり、たとえ儒者の娘であっても女子の教養として漢詩文は認めない傾向が強かった。江戸後期から明治に活躍した儒者中村栗園（1806-1881）は「女子に書を讀ませむべからざる論」という文章を書いて、女子に学問をさせることに対して徹底して反対の意見を示している。栗園は福岡藩儒亀井昭陽の門人であるが、昭陽の娘少琴、またその幼馴染である原古處の娘采蘋の教育に対して「昭陽亀井先生其の女少琴に讀書せしむ。長ずるに比して学力富膽氣象磊落なり。而して睫底復た男子無し。後先生臍を噬む。是余の靚聞する所也。古處原翁女采蘋あり。亦好みて讀書す。四方を漫遊して才藻を以て時に梟がす。而して頗る醜聲有り。其他類推すべし。余深く女子の讀書を惡む。故に余の門に女子無し。」と厳しく非難している。幕末から明治に至っても、女子が学問をすることに対してこのような偏見を持ち続けた学者は後を絶たなかった。

本研究の主人公原采蘋は、栗園によって非難された一人で、江戸後期に活躍した漢詩人である。栗園の言葉にもあるように、父に漢学を学び、女性としては珍しく独立した漢詩人として各地を遊歴し、一生涯を独身で通した。その生き方は儒教道徳の規範にそぐわないとして父の友人や知人の儒者たちから非難、あるいは忠告の言葉を受け続けた。しかし采蘋が人から非難されつつも、選択を余儀なくされたその生き方の背景には、父の遺言という重い責任があったのである。かつて頼山陽は采蘋の詩の添削を依頼され、その註に「教訓素有り、女兒の身に重かる可し」と書いている。

原采蘋は寛政十年(1798)、福岡藩の支藩である秋月藩の儒者の家に生まれた。名は猷、またの号を霞窓といった。幼少のころから学才を現し、兄の瑛太郎、弟の謹次郎とともに父の教育を受けて育った。父の原古處は代々藩儒の家に養子となり、亀井南冥の門で頭角を現し、秋月に帰郷後、寛政十二年には藩校稽古館の教授となり、以後八代藩主黒田長舒の推挙もあり、文化八年には御納戸頭と学館教授の兼務を仰せつかるという異例の出世を遂げた。このような家庭に育った采蘋は、塾生から「采蘋さま」と慕われて育った。しかし、原家の家運はこの後、寛政異学の禁の秋月藩への波及により急速に下降してゆく。徂徠学派の古處はお役御免となり、この事が采蘋の人生を大きく左右することとなった。家督を相続するべき兄弟が病弱であったこともあり、健康で学才豊かな采蘋は、三代続いた儒者の家系を継承する役目を期待されるようになった。父は采蘋を儒者あるいは漢詩人として江戸で成功させたいと願い、「不許無名入古城」という詩句にその願いを込めて采蘋を送りだした。そのため采蘋は、二十八歳で遊歴詩人となって江戸を目指したが、この時は父の病気のため京都より一旦帰郷し、父の死後はその遺命を背負って、再び三十歳で家を出てから五十一歳で故郷に帰るまで、江戸に拠点を置きながら関東周辺を遊歴した。この二十年間は采蘋の漢詩人としての最盛期であり、江戸詩壇における名声も確固たるものが残されているが、残念ながらこの間に書かれた詩はあまり残っていない。その理由は江戸で拠点としていた称念寺が二度の火災にあっていることと、帰郷する際に荷物を友人に預けたままであったことなどから遺稿が散逸した可能性が考えられる。五十一歳で母の病を聞き、志半ばで帰郷してからは、私塾を開いて生計を立て、母を養った。母を取った後の五十九歳から六十一歳まで九州各地を遊歴し、書の依頼などによって得た収入で父にふさわしい墓碑を建立し、

最後に残された父の遺稿の上木を成し遂げるために六十二歳で再度江戸に向けて出郷したが、途中萩で流行病に罹り客死した。

江戸時代を通して武家の女性の意識を制約した儒教道徳は原采蘋の人生にとっても最も重要な位置を占めていた。特に儒教の経典の一つである『孝経』を重んじた家庭に育った采蘋は孝道を人生の最優先として人生設計をしてきた。江戸から秋月藩主に提出した上書には采蘋の「孝」に対する考えがはっきりと示されている。「妾固く人に嫁さず、獨立経営、爲す所有るを欲す、亦た唯だ父母の爲なり。」と。父母兄弟への孝養を重んじた生き方は多くの友人知人が認めるどころであり、最愛の弟子と言われた戸原卯橘が采蘋の再発郷にあたって送った詩序に「先生孝の純者なり」と言い当てていることから納得出来る。しかし、自ら選択した人生といえども、采蘋の詩や文章の中には、それがいかに過酷な人生であったかを正直に語っている。井上参政宛ての上書には、江戸時代に女性が単独で遊学することに対する人々の偏見を次のように書いている。「悲しいかな。世に生れて女と爲る。千里獨行、豈に容易ならんや。始めて蘋東遊するや、聞く者皆令笑す。女侠の流を學ぶを以て爲すと。蘋獨り斷然として顧みず。單身疆を越ゆる、以て恃む所有るなり。」と。

確かに儒教倫理もさることながら、江戸時代に女性が単独で九州から江戸までの旅を続けることの大変さは想像を超えるものであったであろう。そのため従来の伝記にはこの部分が強調されて、不運な人生を生きた薄幸の女性漢詩人というイメージが定着している。はたして采蘋の一生は、父の遺言から生涯解放されることがなく、苦痛に満ちた生涯であったのだろうか。作品を読む限りでは、采蘋は強固な自我意識の持ち主であった。采蘋の生き方は、孝を貫いたと同時に自我を貫いたともいえるのではないだろうか。遊歴の先々では江戸時代を代表する儒者・漢詩人と交流し、男性と互角に詩酒を交わしている。江戸後期の遊歴詩人が地方の裕福な知識人に歓迎されて一年～二年に及ぶ長期滞在が許されていた時代に、采蘋も頼山陽や梁川星巖と同じように彼らのたどったルートをたどりながら房総・九州と遊歴を重ね、それぞれの地方の文人との親睦を深めていった。十八歳から始まった遊歴の習慣は、常に采蘋を旅に誘ったようだ。父から譲り受けた「東西南北人」という印は、凶らずもそれにふさわしい人生を采蘋にもたらしたのかもしれない。采蘋の遊歴の日記からはその名声が地方の有力者や知識者に伝わっていること、そのために各地で歓迎されている様子が書かれている。ここにはジェンダーを乗り越えて成功した一人の漢詩人としての自信と誇りを見ることができる。

原采蘋は、同時代に活躍した江馬細香や梁川紅蘭とは異質な女性漢詩人であった。江馬細香や梁川紅蘭も江戸時代の女性としては自我を確立し、進歩的に生きた女性であったが、原采蘋はむしろ近代的な思想をもった女性であった。その考えとは儒教の説く男尊女卑ではなく、男女平等の思想を有していたのである。それを証明する資料として、采蘋が生涯尊敬していた貝原東軒の書に跋文を求められて書いた文章がある。この跋文で采蘋は、儒教の徳目について説いた「女訓書」に言及し、「女子才無きは便ち是れ徳」と一般的にいわれるが、これに対して反論する曹大家の説を引用しつつ、儒教の徳目で女性に求められた四徳（婦徳・婦言・婦容・婦功）を兼備するにも、夫に仕えるにも不才ではできないことであり、また夫に才能がない場合でも、夫人に才能があればそれを助ける事が出来るので、女子の才あるは何も害にはならないという自らの見解を述べている。つまりこの考えは貝原益軒と東軒の夫婦のあり方を理想と考える采蘋の思想の裏付けであり、自らが王節婦や曹大家らの女訓書から学んだ上で、女性のあるべき姿として目標としてきたものである。

しかし采蘋は、この理想の夫婦像を抱きながらも、目的のために結婚を後回しにしてきたが、三十代の初めには恋愛も経験し、その経験を詩に書き残している。采蘋は貝原東軒のように一人の男性に仕えることは出来なかった代わりに、全国を遊歴することで、著名な学者・漢詩人との交流を可能とし、また地方の有能な青年に教授する機会を得ることができた。房総遊歴の日記『東遊漫草』や最晩年の九州遊歴の日記『西遊日歴』からは、地方の有力者・知識者との交流が采蘋を慰め、心温めるものであったことを伝えている。また采蘋の性格は「豪放磊落」といわれるように物事にこだわらない性格が人々に好かれたと思われる。さらに酒豪であったことも心を開いた交流を可能とし、采蘋の人生を豊かにした要因であったと思われる。